メッセージアウトライン
ルツ記2:1～23

「時と場所と人を備えられる神」

　神は祝福を与えるために時と場所を準備され、特に人を用いられる。→出エジプトの時のモーセ、ヨシュア、イスラエル王国のためにサムエル、ダビデ、イスラエル人存亡の危機にモルデカイ、エステル、イスラエル再建のためにエズラ、ネヘミヤ等。そしてこのルツ記2章では一人の人物に焦点が当てられていく。
[1]「さて、ナオミには、夫エリメレクの一族に属する一人の有力な親戚がいた。その人の名はボアズであった」
「有力」とはこの場合は金持ちのこと。「ボアズ」…「彼のうちに力がある」の意
[2]「モアブの女ルツはナオミに言った。『畑に行かせてください。そして、親切にしてくれる人のうしろで落ち穂を拾い集めさせてください。』ナオミは『娘よ、行っておいで』と言った」
　律法によれば、寄留者や孤児、やもめは落ち穂を拾う権利が与えられていた。→申命記24:19
しかし、それが実際にどこまで実行されていたかはわからない。ルツは外国人なので仕事に就く当てもなく、せめて生活のために落ち穂を拾いに行こうとしたのである。
[3-4]「ルツは出かけて行って、刈り入れをする人たちの後について畑で落ち穂を拾い集めた。それは、はからずもエリメレクの一族に属するボアズの畑であった。ちょうどそのとき、ボアズがベツレヘムからやって来て、刈る人たちに言った。『主があなたがたとともにおられますように。』彼らは、『主があなたを祝福されますように』と答えた」
　「はからずも」とは「思いがけず」、「計画なしに」という意味。偶然性が強調されている。ルツが落ち穂を拾いに行った畑は親族にあたるボアズの畑であった。偶然のように見えるが、これは神が用意された最善の場所であった。「ちょうどそのとき」…神は、時も、場所も、人も備えてくださる。それは出会いにおいて頂点に達する。ルツが無意識のうちにボアズの畑に導かれたちょうどそのとき、ボアズが町からやって来た。そして働く者たちと互いに祝福の挨拶を交わした。
イスラエルはアブラハム以来の神の選びの民であるので、このような挨拶は自然なことであったと思われるが、しかし、この時代は土着の宗教を取り入れて偶像礼拝に陥るイスラエル人も多くいたので、ここに登場してくる人々はイスラエルの神、主に対する健全な信仰を持っていたことがわかる。
[5]「ボアズは、刈る人たちの世話をしている若い者に言った。『あれはだれの娘

か。』」
　ナオミについてモアブから来たルツのうわさはベツレヘムの町中に広まっており、ボアズの耳にも入っていたと思われるが、ルツと会ったのは初めてであった。
[6-7]「……あれは、ナオミと一緒にモアブの野から戻って来たモアブの娘です。彼女は『刈る人たちの後について、束のところで落ち穂を拾い集めさせてください』と言いました。ここに来て、朝から今までほとんど家で休みもせず、ずっと立ち働いています。」
　この報告の中にルツの勤勉さがよく表れており、若者たちもルツに対して冷たく接していた様子は感じられない。そして主人であるボアズと働き人たちの間には平和で良好な関係が感じられる。
[8-9]「ボアズはルツに言った。『娘さん、よく聞きなさい。ほかの畑に落ち穂を拾いに行ってはいけません。ここから移ってもいけません。私のところの若い女たちのそばを離れず、ここにいなさい。刈り取っている畑を見つけたら、彼女たちの後について行きなさい。私は若い者たちに、あなたの邪魔をしてはならない、と命じておきました。喉が渇いたら、水がめのところに行って、若い者たちが汲んだ水を飲みなさい。』」
　ボアズの畑以外のところに行くと、外国人だからという理由でいじめられる恐れがあったのであろう。また若者たちへの注意や飲み水への配慮などには、単に親戚にあたるからというだけでなく、それ以上の好意を感じられる。
[10]「彼女は顔を伏せ、地面にひれ伏して彼に言った。『どうして私に親切にし、気遣ってくださるのですか。私はよそ者ですのに。』」
　ボアズの並外れた親切に打たれたルツは顔を伏せ、地面にひれ伏して感謝と敬意を表し、自分はよそ者なのにどうして気遣ってくださるのですかと尋ねる。
[11-12]「ボアズは答えた。『あなたの夫が亡くなってから、あなたが姑にしたこと、それに自分の父母や生まれ故郷を離れて、これまで知らなかった民のところに来たことについて、私は詳しく話を聞いています。主があなたのしたことに報いてくださるように。あなたがその翼の下に身を避けようとして来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように。』」
　ボアズはルツが姑にしたこと、父母や生まれ故郷を離れて知らない民のところに来たこと等について詳しく話を聞いていると言う。またルツがナオミの信じている神を自分の神として信仰告白している(1:16)ことも聞いていたかもしれない。
「主があなたのしたことに報いてくださるように」ボアズのルツへの親切は主から彼女への報いの代行としての面もある。「翼の下」とは主なる神の恵み深い守りを示す表現。
[13]「彼女は言った。『ご主人様、私はあなたのご好意を得たいと存じます。あなたは私を慰め、このはしための心に語りかけてくださいました。私はあなたのはしため

の一人にも及びませんのに。』」
　ルツの謙遜さは自分をはしためよりも低い位置に置く。
[14]「食事の時、ボアズはルツに言った。『ここに来て、このパンを食べ、あなたのパン切れを酢に浸しなさい。』彼女が刈る人たちのそばに座ったので、彼は炒り麦を彼女に取ってやった。彼女はそれを食べ、十分食べて、余りを残しておいた」
「酢」とは酸っぱくなったぶどう酒に少量の油を混ぜたものであり、暑い時には、渇きをいやし、食欲を増進するのに最善の飲み物であった。「入り麦」はまだ十分に乾燥していないままの大麦を炒ったものでおいしいものであった。彼女が十分食べた余りは姑のナオミにやろうとしたのであろう。
[15-16]「彼女が落ち穂を拾い集めようとして立ち上がると、ボアズは若い者たちに命じた。『彼女には束の間でも落ち穂を拾い集めさせなさい。彼女にみじめな思いをさせてはならない。それだけでなく、彼女のために束からわざと穂を抜き落として、拾い集めさせなさい。彼女を叱ってはいけない。』」
　これは単なる同情心を超えて、ボアズがルツの身に強い関心を寄せたことを意味する。
[17]「こうして、ルツは夕方まで畑で落ち穂を拾い集めた。集めたものを打つと、大麦一エパほどであった」
　一エパは23リットルであるので落穂拾いの量としては異常に多い。
[18-19]「彼女はそれを背負って町に行き、集めたものを姑に見せた。また、先に十分に食べたうえで残しておいたものを取り出して、姑に渡した。姑は彼女に言った。『今日、どこで落ち穂を拾い集めたのですか。どこで働いたのですか。あなたに目を留めてくださった方に祝福がありますように。』彼女は姑に、だれのところで働いてきたかを告げた。『今日、私はボアズという名の人のところで働きました。』」
　落ち穂の量と炒り麦とルツの輝く顔を見て、ナオミは特別の人物でなければこのような好意を示してくれるはずはないということを悟った。そして彼女はその人物の名はボアズであると知った。
[20]「ナオミは嫁に言った。『生きている者にも。死んだ者にも、御恵みを惜しまない主が、その方を祝福されますように。』ナオミは、また言った。『その方は私たちの近親の者で、しかも、買い戻しの権利のある親類の一人です。』」
「生きている者」とはナオミとルツのこと、「死んだ者」とは夫と息子たちのこと。今、ナオミとルツに主の祝福が及んで来るということは、死んだ夫と息子たちにとっても主が恵みを惜しまれないことになる。すなわち、すでに主なる神のもとへ召された夫と息子たちは、神のもとで豊かな恵みを受けているということである。聖書は、人間は死んで無に帰するということは教えていない。→伝道者12:7、ルカ16:19~31、マタイ25:46
「買い戻しの権利のある親類の一人」…「買い戻し」は「ゴーエール」ということばで

「贖う」とも訳せることばである。家族や近親者が奴隷の状態に陥った時には買い戻す権利があり、また売られた土地を買い戻す権利もある。さらには血の復讐をする場合もある。→レビ25:25、エレミヤ32:7、
民数記35:12、Ⅱサムエル14:7
買い戻しの権利のある者としてルツの前に立つボアズが、このルツ記を通して、アダム以来の罪の中にあるすべての人間の贖い主なる神を予表していることに私たちは思い至らされるのである。
[21-22]モアブの女ルツは言った。「その方はまた、『私のところの刈り入れが全部終わるまで、うちの若い者たちのそばについていなさい。』と言われました。ナオミは嫁のルツに言った。「娘よ。それは良かった。あの方のところの若い女たちと一緒に畑に出られるのですから。ほかの畑でいじめられなくてすみます」
　ルツが出かけている間、ナオミはずっと案じていたのであろう。ほかの畑に行けば外国人としていじめられることをナオミはわかっていたのであろう。それは自分たちがモアブの地に住んでいた時に経験したことであったのかもしれない。
[23]「それでルツはボアズのところの若い女たちから離れないで、大麦の刈り入れと小麦の刈り入れが終わるまで落ち穂を拾い集めた。こうして、彼女は姑と暮らした」
　大麦の刈り入れの後に小麦の刈り入れの時が来る。この期間はボアズの畑でルツは落ち穂拾いをすることができる。
「すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みに時がある」(伝道者の書3:1)
ナオミとルツがベツレヘムに来るのが大麦の刈り入れの頃でなかったなら、ルツが落ち穂を拾いに行った畑が別の人の畑であったなら、ちょうどこの時にボアズが畑にやって来なかったなら、ナオミとルツの運命は全く違ったものとなっていただろう。すべては偶然の取り合わせのように見えるが、そこに神の摂理の御手が働いていたのである。そして神は私たちにとっても同様に摂理をもって導いてくださるお方なのである。
神はルツのために時と場所と人を備えられた。そしてそれはイエス・キリストによる救い、人間の罪の贖いへと続いていく。
「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」(伝道者の書3:11)
「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画に従って召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています」(ローマ8:28)